

白すみれとしいの木

小川未明

青空文庫

きたほうむらなか
 北の方のある村に、仲のよくない兄きょうだい弟あにがありました。父ちちお
 やしあとおとうと
 親の死んだ後は兄は弟をば、むごたらしいまでに、いじめまし
 た。

おとうと
 弟は、どちらかといえば、気きのきかない、おんぼりとした質たちで、
 がっこう
 学校へ行つても、あまり物もの事ごとをよく覚えおぼませんでした。だか
 ら、兄あには弟をば、つねにばか者ものあつか扱あつかいにしていたのであります。
 おとうと
 弟は気がやさしくて、けつして兄あににたい対して手向てむかいなどをした
 ことがありません。いつも兄あににいじめられて、しくしく泣ないてい

ました。

冬の、ある寒い寒い晩のこと、格別弟が悪いことをしたので

はないのに、兄は弟をいじめました。

「おまえみたいならばかは、こんな寒い晩に外に立っているがいい。そして、凍え死んだって、俺はおまえをかわいそうとは思わないぞ。」と、兄はののしりました。

弟は、どうかそんなことはいわずに、家の中に置いてくれいと頼みますのを、兄は無理に弟を戸の外に出して、かぎをかけてしまいました。

家の外は、野にも山にも雪が積もっていました。その晩は、めったにない寒さであつて、空は青ガラスを張ったようにさえて、

星晴ほしばれがしていました。また、皎々こうこうとした月つきが下界げかいを照てらして
いました。

おとうと　ゆき　うえ　ぼうぜん
弟おとうとは、雪ゆきの上うえに茫然ぼうぜんとしていますと、目めから流ながれ出でる涙なみだまで
が凍こおつてしまうほどでありました。弟おとうとは、こんな不運ふうんなくらいな
ら、いつそ河かわにでも入はいつて死しんでしまつたほうがいいと思おもいまし
た。

いつのまにか、寒さむさのために雪ゆきの上うえは堅かたく凍こおつていました。そ
れは鋼鉄はがねのように、飛とび上あがつてもカンカンと響ひびくばかりで、埋う
まることはありませんでした。

おとうと　ゆき　うえ　わた
弟おとうとは雪ゆきの上うえを渡わたつて、河かわのある方ほうへいきました。すると、河かわの
水みずもまた鋼鉄はがねのように凍こおつていたのであります。

身を投げて死のうにも、水がないし、どうしたらいいだろうと
思つて、途方に暮れていますと、はるかかなたに、きばのように
とがった高い山が、月に照らされて見えるのでありました。

昔から、あの山の下には、鬼が住んでいるといわれていました。

二

弟は、どうせ死ぬなら、いつそ鬼にでも食われて死んでしまつ
たほうがいいと思ひました。それにしても、何十里あるかわかり
ませんでした。

月光に照らされている、その遠い山影を望みますと、もし

雪を渡つてまつすぐにいくことができたらそんなに遠くもない
 だろう。駆けて、駆けていったら、今夜の中にもいられないこと
 はないと思われました。

弟は、そう思うと、雪の上をひた走りに走りはじめたのです。

河も野もどこも平坦な白い畳を敷き詰めたようでありましたか
 ら、どんな近道もできるのでありました。

彼は、駆けて、駆けて、駆けぬきました。そして疲れると、体
 から汗が出て、これほどの寒さもそんなに寒いとは思いませんで
 した。彼は、ところどころ休みました。そして行く手にそびえて
 見える高い山を仰ぎました。月の光が、かすかにその山を浮き出
 しているのです。

おとうと

弟は、ほとんど自分でも、どうしてこうよく走れるかわからないほど走りまわりました。そして、どこをどう走つてきたかわかりませんでした。夜明けごろでありました。赤い火の球が自分の前になつて、雪の上をころころと転がっていきました。

彼は、これはなんだろうと思ひました。きつと魔物にちがいない。けれどももう自分の命を惜しいと思ひませんから、それをつかまえようといつしようけんめいに跡を追ひました。すると火の球は、ころころと谷底に転がり落ちました。

彼も、火の球について谷へ下りようとしますと、もはや夜が明けかけていました。そして、そこは路もないまったく山中で、あのきばのように高い山は、まだ遠くなつて見えなかったのであります。

どうしたらいいかと思つて、まごまごしていますと、その中に
 ひひかりの光がさしてきました。雪はしだいに軟らかくなつて、弟は、
 もう一步も身動きすることができなくなりました。

ちようどそこへ、薪を負つたおじいさんが通りかかりました。
 おとうとみそして弟を見つけて、こんなところに少年がいたのでびつくり
 いたしました。

三

おじいさんは、この山中にただ一人住んでいる不思議な人
 間でありました。弟は、おじいさんの小屋につれられてまいり

ました。

「こんな山やまなか中なかだけれど、なに不自由ふじゆうはない。長くここに住すめば、春はる、夏なつ、秋あき、冬ふゆ、いろいろの美うつくしいながめもあれば、楽たのしみもある。おまえはいいと思おもつたら、いつまでも住すむがいい。」と、おじいさんはいいました。ふもとには、温おん泉せんもわいていたのであります。

そのうち雪ゆきが消きえて春はるになりました。弟おとうとは、故郷こきようが恋こいしくなりました。いまごろ兄にいさんはどうしていなさるだろうかと思おもいました。そのことをおじいさんにいいました。するとおじいさんは、木きの実みと草くさの種たね子を弟おとうとに与あたえました。

「この草くさの種たね子は、白しろすみれだ。おまえが、この種たね子をまきなが

らいけば、またここへ帰つてくるような時分に白い花が咲いてるので路がわかる。この木の実は、おまえが腹が減つたときに食べるしいの実だ。」といいました。

弟は、最初、この山へくるときには、雪の上を渡つて一夜にきましたけれど、雪が消えてからは、森や、林や、河があつて、五日も六日も歩かなければ、自分の生まれた村に帰ることができませんでした。彼は、木の実と草の種子をもらつて、出発したのであります。そしてある日の暮れ方、彼は、ようやく懐かしい我が家へ帰つたのであります。

「兄さん、ただいま帰りました。」と、弟はいつて、敷居をまたぐと、なにかしていた兄は、びっくりして振り向いて、

「おまえは、まだ死しななかつたのか。もうおまえおとうとみたいなばかには用事ようじがないから、さつさと出でていけ。」といつて、弟おとうとは、取とりつく島しまがなかつたのです。

「自分じぶんの真まごころ心こころがいつか、兄にいさんにわかるときがあるろう。」と、おとうと、ひとつぶ弟おとうとは、一粒ひとつぶのしいの実みを裏庭うらにわに埋うめて、どこへとなく立たち去さりました。

兄あには、その後ごしろ白すみれの花はなを見て、いじらしい花はなだと思おもいました。そして、弟おとうとの姿すがたを思おもい出だしました。また、しいの木きに風かぜの当あたるのを聞きいて、悲かなしいと思おもい、弟おとうとをいじめたことを後こう悔かいしたそうです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「読売新聞」

1920（大正9）年1月9～10日、12日

※表題は底本では、「白《しろ》すみれとしいの木《き》」となっています。

※初出時の表題は「白堊と椎木」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白すみれとしいの木

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>